
無題

トラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無題

【Nコード】

N0327BA

【作者名】

トラ

【あらすじ】

具現武器という能力がある。それは自分に与えられた相棒かつ自分の力だった。それを学ぶ事が出来る学校に、少年、笹外龍騎はいた、ただ、その手には明らかに不気味な、なおかつ具現武器の中ではレア中のレアである剣が握られていた。ある日少年は実技から抜け出すと、奇妙なものを拾う、そこから少年の物語は始まった。なにか訳ありの怪しい少年との出会い、強大な外の生物の進入、組織のようなものに目を付けられる、そんな波瀾万丈な出来事に遭遇する、なんともいたたまれない少年、笹外龍騎の物語。

プロローグ

「
」

軽快な足取りで少年はとある場所へと向かっていた。

少年の名前は笠外龍騎、クセの強い天然パーマ特徴的で中性的な顔立ちをしている。

少年は唐突に足を止め、目の前の扉を一瞥した後、手を胸に当て、静かに呼吸を整える。

よしつと聞こえるか聞こえないかぐらいの音量で言い放ち、扉を開けた。

その空間は何もなかった。

部屋は目が痛くなるほど真っ白で、まるで自身が浮いてるかのよう
に錯覚させる。

少年はその空間に少し面を食らっていたが、直ぐに立ち直って、
部屋の中央へと向かう。

そこにはそれまた白い台があった。中央に丁度てが入れられるほ
どの穴が開いている。

少年は迷うことなくその穴に手を入れた。

少し痛みが走ったようで、少年の顔は歪んでゆく。

やがて苦悶の表情から、普段のお気楽な表情へと戻り、手を抜こうとする。

その手にある確かな重厚感に胸を躍らせながら。

「^{パートナー}武器を認証完了、適正確認……ok 武器の生成……ok 決まりました、武器名称は……」

「ユニークランクの武器、モロバノツルギ 特性 呪われている、武器使用时、生命の有るものに与えるダメージと等価のダメージを受ける。 威力増幅 第二段階移行……未明」

「……はい？」

少年は素っ頓狂な声をあげ、手にある武器を見た。

そこには全ての苦痛を再現したかのような禍々しい装飾がなされ、剣身に黒い霧が掛かっている

呪われた武器があった。

「……ええええええええー！」

少年はなんの抵抗もなく、そのまま今の心情を叫び声で吐きだした。

それは具現武器と言われ、生涯のパートナーとなる己の剣であり、そして化身である。

そのなかで一人の少年、龍騎は呪われた武器を手にした。

これはそんな何ともいたたまれない少年の物語。ストーリー

第一話（前書き）

いちいち本文が短いという罫

第一話

「ええ？　ちょ、ええ？」

少年は困惑を隠さずには居られなかった。

この学園では具現武器というあらたな能力を育てる為に作られ、その具現武器を用いて実際に訓練をする。

といっても勉強を主としているので、実技以外はいたって普通だ。

そして、その武器はランク分けがなされている。

その武器自体は武器認証、つまりはあの白い空間でその個人の素質を読み取り、適した武器が与えられる。

ランクは　ポアー　ノーマル　レア　マスター　レジエントとあって、その枠外に位置するたった一つしかない武器、ユニークランク。

そのユニークランクである武器が自分の適正だったのだ。

それ自体は喜ばしい事なのだが、少年は別の所で困惑していた。

「お……お……」

少年は手元にある禍々しい剣を見て、のどにつつかえている気持ち

「俺は自虐趣味なんてモンはないんだあー！ー！」

真っ白い空間で、吐きだした。

向かい側の扉から一人の少年が出てきた。

その少年はなぜかげっそりしており、辺りに負のオーラをまき散らしている。

具現武器は収納が可能で、いつでも取り出せる反面、それを用いて問題など起こそうモノならキツイお灸が据えられる。

少年は現在武器を収納しているが、その負のオーラで回りの人間は少し引いていたのだが、少年は気がつかなかった。

少年は辺りを見渡すと、たくさんの人が自分の武器を紹介したり、雑談をしている。

所々外れている人もいるようだ、それは龍騎とほぼ同じ境遇の者達だ。

話の話を完全に入れない、これは龍騎にとって苦痛以外の何者でもなかった。

とりあえず座るところはないかな、と椅子のようなものを探して

いると、遠くから歓声が聞こえてくる。

耳を澄ますと、そこには金髪の少年がいた。

少年は手元の武器を少し上に掲げながら、なにか演説じみた事をしている。

「うわぁ……すごい、マスタークラスだってさ」

「いいよなー俺なんかノーマルクラスだし」

「いやそれが普通だって」

そんな話し声が所々から聞こえてくる、龍騎は見に行ってみるかな、と呟いて、金髪の取り巻きへと紛れた。

「フッフ、驚いたか！これがマスタークラス具現武器である……」
…っと、自分の武器名称を伝えるのは相手に自分にとって不利になる情報を与えるだけだから押さえておくが……」

などいたいそうなドヤ顔で演説じみたことをしている金髪、武器名称なら実技の時ばれるだろうに、と呟く龍騎。

ここにいてもしょうがないな、と言った様子で踵を返し、元々いた仲間はずれの場所に帰ろうとしたのだが。

何とも、そう言った行動は金髪にとっては許し難い行動のようだった。

「貴様！この俺の有り難き言葉の途中にどこに行こうとしてい

る？」

まるで言葉が詰まったが、良い話題が見つかったかのような顔をしながらこちらを向いてそんな事を言つてのける金髪。

確かに、言葉が詰まって四苦八苦しているのは見ていた龍騎だが、なんで俺なのだろうか、と今日の2度目の理不尽に嘆いていた。

龍騎は首だけをその金髪に向ける、すると金髪はなぜか身体を震わせていた。

「え？ なに？ どした？」

「上等だ貴様……我が具現武器である輝石の剣で打ちのめしてくれる！」

しばらくの沈黙、だが、その言葉を真つ先に理解した少年は本日2度目の叫び声を上げた。

「どうしてこうなった……？！ というかお前武器名称あつさり言ってるし……！」

「う、五月蠅い！ とにかく決闘だ！」

その様子に呆れる取り巻き、呆然としている取り巻き、別の話題に移った取り巻き、そんな様子を見て龍騎はさすがのような視線を向ける。

その返答は全て同じ、《お気の毒に》だった。

「い、いや、ちょっと！　なんで皆無視?!　というかそんな気の毒そうな視線をこっちに向けなくてくれ!」

「はいーちよっと良いかー」

と、一人の教師らしき人物が出てくる。

どうやら全員の武器認証が終了したようで、教師らしき人物が待機している生徒を呼びに来たようだ。

「お前達……入学そうそう……まあいい、それはともかく全員武器認証は済んだな?　では私に着いてこい」

その教師はいかにも面倒臭そうな表情で、かつ、金髪を窺めるかのような表情で龍騎達に言い放ち、どこかに歩いて行く。

金髪はいかにも不満げだが、仕方なく、といった表情でその教師について行く。

龍騎は少し呆然として、そこから立ち直ると、髪を一通りかきむしってからそれに続いた。

「ではまず私から、私の名前は深川、まあ下の名前はいい、と言うか名前は覚えなくても良い」

そんな様子で、記念すべき第一回のHRが始まる。

名前を覚えなくても良いなどという教師は初めてなので、クラスの生徒はしばし呆然としていた。

「ふむ……ま、所でだ」

とそんな空気を断ち切るかのように、彼女は声を発する。

「とりあえず個人の技量を確かめる……っっていう名目だが、まあ要するに教員達にボコられてこいつっていう恒例の……」「ちよつとまったつああああ！」

とりあえず龍騎はなにやら物騒な事が聞こえたので無理矢理中断させる。

その様子にクラスメイト全員の顔がこちらに向く、無論、金髪もだが、なぜかその顔はにやついていた。

「どうした？ あー……笹外？」

と、深川はクラス名簿のような紙に目を通してから返答する。

「いやいやいや、まだろくに経験も積んでない私達が先生達について、理不尽過ぎじゃあないんでしょうか?!」

龍騎の発する言葉にクラスメイト一同が賛同しているようだった。

一人を除いて。

「ほう……貴様、俺がまともに経験を積んでないだと？ 笑わせ

それに刃向かえる者はこのクラス内には存在しなかった。

「まあ元々伝統行事ではあるし、しょうがないんだ、私もできればやりたくないんだが……」

と、頭と腰に手を当てて溜息をついた深川。

その言葉に反応したのは誰もいなかった。

「それでは、今から約5分程度で指定された場所へ向かうように、あー……第一演習場……あー忘れた、適当にそこら辺の教員とかに聞いてくれ んじゃ」

「……あんたも教師だろうが！」「」「」

なんとも適当な事を行って教室を出ようとする深川に対して、初めてクラス全員の心が一致した瞬間だった。

一言で表すならば、そこは圧倒的な空間だった。

第一演習場ではなく、第五演習場だが、その中心に円形の舞台があり、その回りはなにか透明なものでドーム状に覆われていた。

その他様々なトレーニング機材や、なにか意味の分からないものまで、様々な者が置いてあった。

今は誰一人としていない第五演習場だが、使い込まれた竹刀のよ
うな物やトレーニング機材が、なにか威圧感をはなっており、龍騎
がその空間に入ることを一瞬ためらったほどだった。

そして今、肝心の担任である深川を待っていたのだが、一向に来
る気配が無く、もうすぐ10分が経過しようとしていた。

自然と、回りの人間の口が緩み出す、所々で今後の抱負のような
事を話し合っている。

「はあー」

龍騎はというと、自然に口が緩んで溜息が漏れ出した。

今日起きた出来事は龍騎にとって多大な精神的疲労を伴う物だっ
た。

ブン……と、どこからかかすれた音が聞こえてくる。

その方向に首を向けると、クラスメイトの一人が具現武器を出し
たようで、それにつずいて、他の生徒も具現武器を出そうとしてい
る。

その時、龍騎は頭に電流が流れたかの如く衝撃を感じた。

龍騎の武器はまれに見るユニークランク、しかもそのランクでは
さらに希な呪いを付加された装備。

要するに出したら非常にまずい、という状況なのである。

今更そんな事に気がついた龍騎は焦る。別にばれてもかまわないのだが、武器の効果知られれば、バカにされるかもしれないという気持ちがあったからだ。

元々具現武器は本人の性格、深層心理、様々なものから、適合する武器が選出される、武器を出現させる方法はいわゆる召喚のようなもので、だれも干渉する事が不可能、故にこのことがばれば、龍騎は自虐趣味の変態の烙印が押されかねないのだ。

どうする、どうする、とブツブツ言っている間に少し前に聞いたやる気のない言葉が聞こえて来た。

「おーいお前等、先生方連れてきたから、とつとと演習はじめんぞー」

そこには深川と、この学校の教師らしき人たち数人があるいてこちらに向かって来ていた。

その声やる気のない声は、龍騎にとっては処刑宣告のようなものだった。

とりあえず何もしないままだと、 HENTAI の烙印が押されかねないので、咄嗟に思いついた嘘でこの場を逃れようとする。

「先生、少しお腹が痛いので今回の演習やすませてもらっていいですか？」

(アホか俺は！ んなの嘘にしか聞こえないだろうが！ お腹痛いから〜っていうのは死亡フラグだバカヤロー！)

満面の笑みで、ただ冷や汗をダラダラ流しながらそれを言う。

深川と龍騎の間に何とも言えない沈黙が流れる、何か他に無いか考え、龍騎がそれを言おうとしたところ、それは深川の声によって遮られた。

「ん……ああ、いいぞ」

「うえ？」

なんとも素つ頓狂な声をあげた龍騎は咄嗟に口を閉じて、逸らしていた目線を深川に向ける。

すると深川は意味ありげな視線を向けてきて、資料のような物にこっそり指を差していた。

その指さす所には龍騎自身の個人情報と、武器名称についてが描かれていた。

顔をあげてもう一度深川に視線を向けると、深川はいけ、と小声で耳打ちした。

思わず泣きそうになったが、少し会釈をして、走って第五演習場を出て行く龍騎。

それを深川は優しそうな笑みを浮かべて見ていた。

表面上は。

「んじゃあみんな、笹外が抜けてしまっただけで演習予定に若干変更が出るが、今日の演習はするぞ、……ああ、笹外を抜けさせたのは私だ、もし時間内に帰ってこずにそこらでブラブラしていたなんて事にはなりかねないから、私はそこで笹外の帰りを待つことにする。よって私は監視役であって演習に参加が出来ない、あー残念だな」

そう言っただけで深川はふう、と息を吐く。

クラスメイトは深川いきなりの長々しい発言に呆然としていたが、その様子を見た深川は黒い笑みを浮かべていた。

後ろの教師たちは溜息をついていたが、そんな様をもるともせず、深川は口笛を吹きながら扉へと向かっていった。

第二話

見事演習から脱出した龍騎は、演習の様子を確認するため第五演習場の窓から生徒達の演習の様子が見える場所へと移動していた。

といつても龍騎自身この学校の構造は全くと言っても良いほど知らないのです、とりあえずうろうろしているとは大分時間が掛かったのかももう既に演習は始まっていた。

そこに深川の姿が見えなかったことに若干の疑問を感じた龍騎だったが、すぐに演習の光景をみてその思考を払拭する。

なぜなら生徒達が一人一人、まるで処刑場に連れて行かれる羊のように演習場中央の円形舞台に連れて行かれ、一方的な攻撃をうけ、全ての生徒が例外なくやられていたからだ。

思わず身震いする龍騎だったが、次に連れて行かれた生徒の戦いぶりをみて目を見張る。

その生徒は他でもない金髪だった。

いままでの生徒と同じように対処する厳つい教員だったが、その第一打撃は見事に金髪にいなされる。

そのことに少し目をみはった教員だったが、すぐに思考を切り替えたのか、落ち着き払って距離をとる。

心なしか、他の生徒も固唾をのんでその光景に見入ってるかのようだった。

次に動いたのは金髪、といってもじりじりと牽制しながら近寄るだけだが、徐々に教員の顔つきも本気の物になっていくところをみると、なかなかうまい立ち回りなのだろうか。

不意に動きを止めた金髪は一気に距離を詰める。

なぎ払うように放たれる剣を、教員は落ち着き払ってバックステップやサイドステップなので避ける。

金髪も埒があかないと思ったのか、すこし顔を顰めて距離をとる。

離れてみる分には余り分らないのだが、その状況は緊迫していると龍騎にはわかった。

そしてなにかボソボソと呟いた金髪、それに反応したのは教員で、なぜかその顔は笑っていた。

すると金髪は突然憤慨し、そのまま教員に突っ込むように攻撃する。

が、その直線的な攻撃は見切られてしまい、サイドステップで躲した後、教員の訓練用の木刀で具現武器をはじかれ、無防備となった鳩尾に容赦なく拳が入られる。

金髪はあからさまに苦悶の表情を浮かべており、反撃する気はないのかその場に崩れ落ちた。

すると先ほどまでの緊張感は無くなっており、また同じように次の生徒が連れて行かれる。

演習に参加している訳では無いのに疲れてしまった龍騎はふう、と息を吐いた。

金髪の事はあまり強くはないんじゃないかと思っていた龍騎だが、いくら得物が違いとは言え教員相手に奮闘したことは龍騎が金髪に対する認識を改めるのに十分だった。

そして演習が終わったようでのこの部屋にいる意味もないと思った龍騎はここから出ようと後ろを振り返り、扉へと歩みを進める……が。

それは足から伝わる感覚で中断されてしまった。

ムニユ

「あ……？ え？ むにゅ？」

いきなりの事に変な声を上げてしまった龍騎は恐る恐る視線を下に下ろす。

しかしその直後龍騎は意味不明すぎることに頭がついて行けず、動けなくなってしまった。

そこには何故か管理区画外の生物、ゼリー状の魔生物がいたからである。

しかも、踏みつけた形で。

「……」

あのあと龍騎は職員室に報告しにいき、これを外に追い払って下さい、と懇願してみたのだが、責任を持って面倒をみる、と溜息をはかれてしまった。

なにせ頭から離れないのである、これでは教員も始末に負えないようで、とりあえず害はなさそうだから、との理由で管理を龍騎に押しつけたのである。

まるでそこが自分の居場所だと言わんばかりに自分の頭を占拠しているゼリーに対して、龍騎はとても悩んでいた。

「どうやって頭洗うんだよ……と。」

やはり異様な環境に導かれる者は少し考え方がずれているのだった。

「ふむ、間抜けな貴様にはそれがお似合いだな？」

すると金髪が少しバカにしたような笑いを浮かべて絡んでくる。

「……うるせー」

「ふん、しかし魔生物が人になつくとはな……まあ最弱のスライム種ならあり得る話なのか……フツ、何にせよその姿はお似合いだ」

非常にむかつく言い回しをされた龍騎、そのままスルーして教室へと向かおうとした、が。

「ああ、そうそう、鳩尾大丈夫か？ 凄く痛がってたけど」

と笑いを吹くんで吐き捨てていくことにした。

その言葉を投げかけられた時、金髪の顔はしばし呆然としており、やがて少しずつ紅く染まっていった。

「なぜ貴様がそのことを……！　っそういえばあの時っ！」

「えーと？　たしか、ここの教員に遅れを取るわけがない、っだっけ？　まあいいや、バイバーイ」

「貴様アアアアア！」

と、何とも子供の悪戯レベルの会話をしたあと、気分が晴れた龍騎は上機嫌でゼリー……もといスライムと共に教室へと向かうのだった。

「あ、そうだ」

龍騎は寮内で呟いた。

今日の学校生活は非常に新鮮なもので、龍騎のテンションを可笑しくさせるのには十分だったのか、夜中にも過ぎず龍騎はあること

を思いついたようだ。

「お前そういえば名前決めてないよな」

するとそれに反応するかのように頭の上でぶるぶると揺れるスライム。

頭から伝わってくる感触を確認した後、物思いに耽る。

「そう言えばいろいろあったなあ……クラスメイト達には色々言われたし、風呂でお湯だしたら急に弱ったし……」

「キュ」

「あ、じゃなくて、名前だな名前、そうだなあ……俺ネーミングセンス皆無って言われた事があるから自身がないんだがなあ……」

その言葉の意味を察したのか、スライムはわずかにピクツッと反応したが、考えに没頭する龍騎は気づかなかった。

「……よし、スライムだから、スライム……ってデデデデデ！
わかった引つ張るな！ わかったから！」

と涙目になりながら訴える龍騎、それに対して頭に乗っかっているスライムは髪を引つ張るのをやめる。

「んー……あー、おー、うー」

「……キュウ」

「キユウ……、いや、なんでもない」

なにか嫌な予感がした龍騎はそくざに引っ込み、また考えに没頭する。

「……そうだ！ キイラってのはどうだ!？」

「……キユウ」

否定しないところをみて肯定と受け取った龍騎は、自分の頭に乗っかっているスライムに向けて命名した。

「よし！ お前の名前はキイラだ！」

「キユキユ」

まあ妥協してやるよ、とでも言い足そうなキイラに若干落ち込んだ様子だったが、名前が決まったことから一気に何もする事が無くなり、やがて睡魔に襲われ、すっかり寝入ってしまう龍騎だった。

第二話（後書き）

スライムさん名前決定（笑

キーになる人物？ ですから悩みました……。ネーミングセンスエ
……。

第三話（前書き）

文章量がGGGGGGGG

第三話

この学校は管理区画内に設立されている。

そもそも管理区画とはある一定の定義がされている区画のことで、その定理とは”魔生物の進入が不可能”というものだ。

それを可能にしているのは一定の領域の定義を設定しているコア、場所と言えば学校の地下深くにある。

そのコアが全ての管理を統括しており、異常が出るとすぐさま対応してり警告がなされる。

コアについては機密事項なのか、一切の情報が公開されておらず、その動力源など様々な事が謎なのだが、無理に情報を公開しろ、などとと言われることもない。

それもそのはず、それによって守られているから、である。

要するに無駄な散策をするより、安全な今の生活が確保できているだけでよし、という状況で今は成り立っているというわけだ。

最近ではコアの研究がなされているとかいう噂も流れているが、それに対するの反応も、変な事をやって魔生物の管理をおかしくするな、というような批判めいたものである。

そして今現在クセの強い天然パーマの頭の上に乗っかっている魔生物、通称スライムというらしいのだが、龍騎はそのことに關心は余り示さない。

問題はなぜ管理区画外の魔生物がこんな所にいるのかと云うことだ。

龍騎なりに色々と考えてみた者の、すべて行き着くのはコアの管理不足からなる魔生物の進入にいきつく。

しかし、いままで人々を守ってきたコアにそんなミスがあるとは思えないし、教員に話を聞いてみてもコアには異常がないそうで、このスライムについては様子を見ると同時に責任をもって育てること。

なぜ育てる必要があるのかときいたら、お前が食べられても……と言われたところで理解して首を激しく振る龍騎だった。

さらに頭の上に乗っかっているというのがまたたちが悪い、これではスライムを処理すると同時に龍騎にも被害がでる可能性がある。

よつするに様子を見るといふことしか出来ない状況なのだ。

龍騎もなにか生物を殺めるといふのは気が引けるし、名前を付けて愛着が湧いたのか、今ではもうなんの違和感も感じなくなっている。

回りを除いては。

「あれだ、あいつあいつ！」

「おおー噂の魔生物を飼い慣らしたっていうあれか……」

「あれって大丈夫なのか？ 仮にも魔生物だろ？ しかもスライム種にしては見たこともない色だし……。」

一通りの反応からして、あまり害はなさそうだが、勘弁して欲しいと龍騎は思っていた。

教室でもいろいろとヒソヒソ話し声が聞こえたり、話しかけてきたりと言うものがあつたが、適当に対応をして、深川のやる気のない挨拶と共に本日の授業が始まった。

その間、キイラは寝っぱなしである、龍騎が少しムツとしたのはここだけの話だ。

授業を終えた龍騎は自分の具現武器について悩んでいた。

明日は武器紹介の日だ。

もともと演習で武器は見られるのだが、それがどういった武器で、どういふ効果があるのか、まったくわからない。

しかもクラスが違えば今後全くとは言わないが目にする機会も少ない、そう言った理由で一人一人武器を紹介する、それが武器紹介だ。

もちろん回避不可能である。

龍騎自体いつかは明らかにすることだろうから諦めはしたものの、紹介の仕方というのは悩むものだった。

個人で紹介の仕方は自由、テンプレートに沿って紹介してもいいし、独自の表現でもOKだそう。

ただし、そのなかに武器の名称と効果を入れることが条件である。

ふと、龍騎は小さなひらめきをする。

それが段々現実という柱に組み込まれてゆき、やがて一つの考えへとなっていた。

龍騎が具現武器を与えられたあの時のことだ。

「効果 武器使用時、生命の有るものに与えるダメージと等価のダメージを受ける。 威力増幅」

龍騎の具現武器には効果が2つあったのである。

その事実気がついたとき、龍騎は小躍りをしそうになった。

具現武器には基本的に1つのみの効果しか与えられず、それはほぼ共通の認識となっているので、龍騎はこう考えた

つまり普通は1つしかない効果がなぜか2つあった、ということ

から片方の「威力増幅」のみを公開すれば良いのではないかと考え
が行き着いたのだ。

幸いにもランクは言わなければならない条件には入っていなかつたので、それで決まりだ！ と心の中で叫ぶ。

突然なぜかテンションが上がった龍騎に怪訝な顔をむけた生徒の数は少なくはなかった。

一体このクラス内で龍騎はどんな印象になっているのかは謎である。

「なあーなあー」

と、そんな事を考えている龍騎に人懐っこそうな声で語りかける少年。

またキイラの事なのかと思って顔を上げて少年をみる龍騎。

その少年を見た瞬間に目に飛び込んできたのは服装である。

身長は龍騎とたいして変わらず、若干下ぐらいなのだが、制服はあきらかにだぼだぼで、足に至っては引きずって歩いているような感じだった。

顔は普通で眼鏡を掛けており、いかにも優等生という感じだ、顔だけならば。

「おま……なにその服？」

「いやねー、なんてゆうかなあ……どうせ月日がたったら身長のびるやる？ やから別に大きめでもええやんってことになったんや、ああ、センサーもゆるしてくれたで」

そのなんとも飛び抜けた考えに龍騎は少し呆然とした。

その顔をみて少年はなにか既視感をおぼえたのか、ふっと笑って続ける。

「まあまあ、そんなことはええねん、あんたなんでそんなモン頭に乗つけてんのや？ 新車のファッション？」

「……いろいろツッコミどころはあるけど、頭に乗つけてるんじやなくて離れないんだ、これ」

「……」

「……」

「ブツ」

「今笑っただろ？！ なあ、今笑ったよな？！」

「くくくつ、いやすまんすまん、ついわらつてもーたわ、それにして離れないって、くつ」

「……用は済んだ？ 出来れば今とてもいいアイデアが浮かんだからそれに着いて考えたいんだけども」

「あんたも大概おもしろいやつやなあ！ あ、俺の名前は葛西伸吾

や！ そっちのほうは？」

「聞いて無いんだが……あー笹外、笹外龍騎だ」

「よし、その顔覚えたで、またなー！」

とそう言ってそそくさとどこかにいっってしまう少年、だがだぼだぼのズボンのせいなのかスピードがあまり出ていない。

「なんだっただ……」

龍騎の呟きは誰にも聞き取れないような小さなものだった。

第四話（前書き）

いきなりの急展開 投下1秒前

第四話

龍騎は今とても困惑していた。

今現在の場所は学校からの帰り道、丁度日が落ちて暗くなってお
り、街灯がなければ人物を特定することは難しいだろう。

その街灯の明かりの下で、一人の少年が龍騎に向かって具現武器
を突きつけている。

いきなりの事だった。

何の前触れもなければ、自分が刃物を向けられる道理もない。

ただそれだけならば困惑するとは言え、今の龍騎の状態にまでう
るたえることはなかっただろう。

そこに立っている少年は制服のような服を着ておりだばだば、特
に目に付く所と言えば足と手の部分を紐のようなものでくりつけ
ている所だろうか。

どこかの民族衣装のようになってるが、その顔と服装には見覚
えがあった。

龍騎は刃物を突きつけられたことにより、緊張の汗を垂らす。

少年の顔が、悪魔のように歪んでいった。

「葛西……か？」

龍騎は震える声を噛み締めながら答う。

その言葉を聞いた少年の顔がよりいつそう歪んでゆく。

ただその顔は、先ほどの悪魔のような笑みではなく、怪訝そうな何かつつかえているかのような顔だった。

「あ……？　なんでお前、俺の名前してんのや？」

「は？」

見間違いではないだろう。

しかもなぜ知っているという問いかけには肯定が含まれており、より龍騎の疑問を大きくさせる。

「いや、何でって、お前から聞いてもないのに名乗ったんだろうが、とうかなぜ俺に刃物を突きつけてきてるんだ？」

「……なるほどな、少し改変したんか……、まあええわ、どうせこれで最後やったんや」

なぜか一人で得心がいったような顔でこちらに再度顔話向ける。

「笹外龍騎、お前を殺して、俺は！」

「え？ ちょ、は？ ってあぶねえ！」

いきなりの理解不明な宣言により振り下ろされた具現武器を躲す。

その具現武器は至る所にダイヤルのような装飾がされており、龍騎のように峰がなく黒い靄のようなものが纏っているようなものではない。

ただその具現武器には異様とも感じ取れる装飾により、龍騎の具現武器とはまた違う威圧感が込められていた。

龍騎も一応訓練らしい訓練はうけているので、ギリギリ身体を反らして躲す。

すると少年は不意に動きを止めた。

「それだよ……」

「は？」

「お前が……お前がそれさえ拾わんかったら！」

「いや！ だからどういっ……！」

龍騎は息を飲む。

ただ少年を正面から視る、それだけの行動で龍騎はいいしれぬ悪

寒を感じ取った。

さっきまでとは違い邪悪な笑いは消えていた。

それと同時にナニカが落ちてしまったように、雰囲気が一変する。

目はとても生きている人間の目ではない。

顔はやつれており、苦悶の表情を浮かべているそれは、龍騎にとつて恐怖にすら感じた。

「……もうこれが最後なんや」

「失敗は出来ない」

「自分なりにしようとしよるんや？」

「やるうやるうとして結局なにもできない」

「無力や」

「救いようがない屑や」

「結局ただ視ることしか出来んやないか」

「なんで……」

「なんで……」

「なにが救」「葛西！」

龍騎が声を荒げる。

「俺はさっき理不尽にも殺されかけた、お前にな」

「……」

「そのせいでお前が何をしようとしたか、俺には関係がないとはいえないくなる」

「……………」

「俺に、教えろ、聴く権利はあるはずだ」

「るせえ……………」

「……………」

「うるせえんだよオオオオオ！」

こちらに向かってくる一直線の攻撃。

だが、その攻撃には決定的にたりないものがあつた。

龍騎は具現武器を出す。

一瞬、龍騎の回りに風圧が発生する。

刃が驚異的なスピードで具現され、やがてそれは一振りの剣となつた。

黒い靄のようなものに包まれたそれには、いたるところに禍々しい装飾がされており、一目見ただけで震え上がってしまうような悪寒を感じさせる。

龍騎は剣をただ横に振るつた。

向かって来ていた剣はあっけなく遠くに飛ばされ、光の粒子となつて消える。

飛ばされた剣の所有者はそれが当たり前だ、というような顔をしていた。

決定的に足りないもの、それは相手に対する殺意のようなものだった。

「殺せや……」

「……」

「もう、ダメなんや、自分では救えんのか、たった一人の肉親さえ……だからいつそその剣でひと思いにやってくれへんか」

「……殺せるか、ボケ」

「……は？」

「……は？ じゃねえよ！ さっきからお前なにいつてんだよ！
せめて事情説明しやがれ！ こっちは殺されかけたんだぞ？ 殺して下さい、はいそーですかってわけにはいくかボケ！」

「……」

「……それに、この剣」

「……？」

少年は龍騎の発言が何をさすものなのかわからず困惑していた。

「この剣で殺しなんぞできるか、俺が死ぬわ！」

言いようのない沈黙、一瞬世界の時間が止まるかのように錯覚する。

「……なんじゃそりゃ」

「……と、とにかく！ 事情話せ事情……まあ、聞いた限りではなにか重そうなのはなしだけど」

「……お前、自分が何拾ったかわかってないんか？」

龍騎は突然の切り出しに少し驚きつつも、首を傾げることで反応する。

「お前のその頭に乗っている生き物、通称人工特殊情報統括機器
コア・インフォメーション
……いま現在で最先端に行くコアの制御装置や」

「……?」

龍騎は言われた事を脳内で反復しているのか、うまくリアクションが取れない。

「……」

「……!?!」

やがて意味を理解したその顔はみるみる驚愕に染まっていった。

「はiiiiiiii?!!」

第四話（後書き）

O
r
z

第五話

「コア、の制御装置って……」

龍騎は惚けたように声を出す、その姿を見た葛西は何食わぬ顔で続けた。

「ああ、まだ公にはされてないんやが、それでコアの制御を肩代わり……まあ要するに乗っ取るちゆうことやな」

「いや……けど、コアについては謎のままなんじゃ……」

「ああ、謎のまんまや、やから、なんでそんな形になつとるんか、研究者もさっぱりや」

葛西はそう告げる、そこに龍騎はいくらか不自然な点に気づく。

「研究者が作ったのにさっぱり？ それはおかしいだろ、それにそれとお前が俺を殺そうとしたのに何の関係があるんだ？」

「詳しいことはよくわからんやが、それがコアの働きを制御できることに変わりはないそうや」

そう言って葛西は一泊あけて。

「……そうしてその事実を知った俺たち、俺の家族親戚は皆殺しや」

淡々と、そう告げた事実。

龍騎は面を食らう、よくないことではあるが、管理区画内での殺し自体は珍しくはない。

だが規模と理由が問題だった。

「なんで……？ そんなことで？」

「情報の秘匿としか考えられへんやろ、事の発端は、俺の姉、姉は数日後お前に接触することからや」

ここで龍騎は不自然な点を指摘する。

「それだよ、なんでお前がまだ起きても無いようなこと、公にされてないような事を知ってるんだ？」

龍騎がそう言い放つと、葛西は溜息を吐いた。

そうして葛西はおもむろに自分の具現武器を出す。

「……なあ、人は何も出来なかったら、諦めるうちゅうのが出来るやろ」

「………？」

龍騎は要領を得ないようで、少し首を傾げる。

「俺は何も出来ない、無力で、駄目な奴やった、けど、な………この具現武器、名称は奪還の剣、効果は時間操作や」

「……………」

「この力があつたから、俺は諦められず能力のリミットまで時間を……戻して、戻して！ 戻してエッ！」

いままでのことを吐き捨てるように言い放つ葛西、その姿は全てを悟つたようで、諦めるという気持ちが入っていた。

「結局、何も変わらんかったんや……………」

「……………」

龍騎は声を掛ける事が出来なかった。

葛西は自嘲を含めた様子で、笑う。

「……………今回の”戻し”でリミット、能力に制限が付いた、やからお前を殺そうとした」

「……………」

「もちろんお前が悪うないのは重々承知はしとるんや、けどな、もう俺にはこれしか方法がないんや……………」

「……………本当にそうか？」

龍騎が言い放った言葉。

それは葛西にとって、自分の無限にも思えた時間を否定されたように、とても許せるものではなかった。

「ッ！ ふざけるなッ！ お前に何が分かる！ 変わらないんだよ！ 姉を説得しても、結局は真実に行き届く！ 一回姉を拘束したこともあった！」

葛西の言葉を受けた龍騎はそれを黙って聞いていた。

「何回も何回も！ 回数すら覚えていない！ それなのに！ お前はッ……………」

「……………そうじゃねえよ」

「なッ……………！」

「ふう、やっぱりお前はアホだな……………もっと簡単で、最高なことが出来る”方法”があるじゃないか」

「は……………？」

葛西は突然の龍騎の言葉に反応が出来ないでいた。

その様子を見て龍騎は苦笑した。

「いやあ、本当に、とんでも無いものを拾ってしまったな……………その研究者とやら、俺の頭を占拠してるキイラに何をしようとしてるんだっけか？」

突然呼ばれたことに、今まで微動だにしなかったキイラはぶるぶると揺れる。

「そりゃあ……コアの研究のために……」

「じゃあ、それを俺とキイラが望んでるか？」

「はあ？」

「ま、要するにだ」

そこで言葉を匂切った龍騎は今までと変わらぬ、お気楽な表情で、
告げた

「その研究所、ぶつつぶすぞ」

「……無茶だ！」

葛西は声を上げた。

その反応は分かっていたようで、龍騎はあっけらかんとして返す。

「お前さ、俺に斬りかかったとき、殺す気はなかったろ」

「……！」

「どうせそのまま斬られて終わりとでもしたかったんだろっが、俺に関わる事を知っている以上、運がなかったと思って付き合えっ

て

龍騎は笑った、それは心の底からの優しい笑みで、葛西は一瞬惚ける。

「それにお前が死んだら、誰がお前の姉を救うんだ？」

葛西は衝撃を覚えた。

それは最初の至極単純な動機。

それを忘れて、ただ機械的に自分の目標を達成できないと悟った程度で諦めようとした自分。

葛西は自分の情けなさで恥ずかしさで、涙を流した。

「……くっ」

「……まあ、たしかに俺みたいな学生で、コアの研究までするよ
うな大きな組織に立ち向かうなんて、狂ってると思えないよな」

葛西は龍騎のほうへ顔を向ける。

その顔は心底楽しそうな顔をしていた。

「……お前、バトルジャンキーかい……」

「いや、違う違う、ただやっとだなんて」

「は……？」

葛西は龍騎の発言に、変な声を上げる葛西。

龍騎はというと本当に楽しそうな、嬉しいような顔をしていた。

「いや、こつやつて親密に人と関わるの、あ、金髪は数には入らないよ」

葛西は啞然とした、たつたそれだけの事で、自ら危険を冒そうとする龍騎に。

「んじゃ、お前は良いみたいだな、キイラは……つと聴くまでもないか」

キイラは早くいこつと言わんばかりにふるふる震えていた。

「んじゃ、お前のことだし、場所知ってるだろ？」

葛西は我に返って龍騎を見た。

葛西のその顔はつきものが落ちたようで、すがすがしい顔だった。

「お前は俺のなにをしつとるんや……まあええわ、ここまで期待させといて、何も出来んかったら本当にお前を殺すで」

「まかせとけて！」

夜の暗い街灯が、走り出す二人の少年を捉えていた。

第五話（後書き）

夜に描いたからおかしな所があるのかも。

第六話

「支部長！ 支部長！」

鉄製の扉が荒々しく音を立てて開かれる。

駆け込んできた男は息が乱れており、呼吸を整えるまでに若干の時間を要した。

その様子を見た支部長と言われた男は、白衣姿に眼鏡を掛けている、それはいかにも『研究者』のような立ち振る舞いをしていた。

「どうした？」

眼鏡を掛け、駆け込んできた男の方には視線を向けぬまま、なにが資料のようなものに目を通しながら返答する。

「は、はい、それがなにやら『ゲート』を突破して破壊活動を行っている侵入者がいます……！」

男はそこで言葉を句切る。

眼鏡の男は視線を前に向けて資料を机の上に置いた。

「……そんなもの、さつさと追い出せばいいだろうが、私は研究で忙しいんだよ、今、外泳がせて外部からのストレスに關係するデータを採取している人工特殊情報統括機器コア・インフォメーションの回収の件はどうしたんだ？」

「そ……それが……」

男は口ごもる、なにか言いたげなその表情を読み取った男は眼鏡を外し、眼鏡ケースのようなものへ収納する。

「なんだ、早く言え」

「その……進入者の頭の上に……乗っかっています」

その報告を聞いた男は何とも形容しがたい表情を見せる。

「おいおい……ちゃんと指定した場所で実験をしていたのか？」

「は……はい」

「はあ……そんな報告つけてねーぞ、本体の形がアレだから人に付いてる時点で報告が入るだろ普通」

男は見せつけるように溜息を吐く。

「ったく、だからこの実験はやめといた方が良かったんだよ、上の人は何考えてるんだか……」

男はその場を移動して椅子に腰掛ける。

「もういい、回収しちまえ、進入者の頭の上に乗っかってるんなら好都合だ、ああ、あと進入者は……」

そこまで言った男は今までの無表情から一変、口角をつり上げ、さも楽しそうに言った。

「ここに来る時点で色々知ってそうだが、アレ使って始末しとけ」

「本当にここがキイラの研究所なのか？」

龍騎は自分の具現武器を仕舞いながら問いかける。

問いかけられた方は少し首を下に向ける。

「ああ、そうや……やけど、ここはあくまでも支部や、本命は他にある」

それを聞いた龍騎は少し啞然としながら言う。

「いやいやいや！ 本命潰さないとどうしようもないだろう！」

「ここは人工特殊情報統括機器コア・インフォメーションの研究を任されている支部や、だからここを変えれば……。少なくとも姉がここに行き着く時、殺されはしないんや」

それを聞いたあと、龍騎は少し疑問に思った。

「けどキイラの研究をしているのはこの組織なんだろう？ だった

ら同じ事じゃ……」

「……あのなあ、今まで俺が何をしてきたのかおもいだしてみい
そう言われた龍騎は葛西の事について振り返る。

「時間を戻して、色々……？」

「ああ、せや、まあ、お前さんみたいに正面から潰すなんて考え
もせえへんかったが、この支部の機能を凍結させたことはあるんや」

「……つまり、それで葛西の姉が殺されなくなる？」

龍騎は必然的にその答えへ行き着く。

それを聞いた葛西は頷き、肯定を示した。

しかしそこには決定的な矛盾があった。

「け……けど、それじゃあお前の目的は達成されたんじゃ……」

それを聞いた葛西は手を両手に挙げる仕草をして、答えた。

「だいたい俺は戦闘はあんま出来へん、俺が出来たんはせいぜい
機能の凍結……データは残った……やから、それはただ姉が死ぬの
を遅らせるだけや、だから……！」

「……この研究データを破壊すれば……？」

葛西は頷いて続ける。

「この支部長は変わりモンの完璧主義者でな、実験のデータが本当に完成するまで詳細なデータは本部に送ってないそうや、ここを破壊すれば研究は大幅な遅れをとる、つまり、機能やなくて研究を凍結させることができるんや……っていうわけにはいかんかもしれへんけど、今俺等二人ぐらいで達成できることはこれぐらいなんや」
けどな、と葛西は続ける。

「今までは俺一人やったから、言えば俺一人ならこの支部の機能を凍結させる事ぐらいは出来た。けど、今回は正面からの乗り込みと破壊、それとお前っちゅうイレギュラーが入った、正直どうなるか分からん」

龍騎は少し頷いて、

「まあ……やらないよりはマシ……か？」

「ああ、それと、もう一つ言うことがある」

葛西は声を低くする。

その様子から重大な事であろうと予測した龍騎は息を飲んだ。

「前もそうやったが……これで俺とお前は完全にこの組織から目を付けられる……それが嫌なら、やめてくれ……」

葛西は自分の知っていること、話さなければならぬこと、今なら引き返せること、なにもかも言いつもりだった。

「たしかにお前ならこの運命を変える事が出来るかもしれん、けど、それはお前が絶対にやらんかったらあかんことやない、お前はまだ引き返せるんや……だから」

しかし、最後の言葉が出なかった、自分でもそれを図々しく思う葛西。

それに反して龍騎は少し意外そうな顔をした。

「……なんや？」

龍騎は我に返って苦笑する。

「いや、意外だなんて、だってお前利用出来るものは何でも利用するようない……ってなんでもないよ、だからその剣をおろしてくれないかい？」

若干口調が変になった龍騎だが、葛西が剣を下ろした後、続ける。

「だいたい、これはお前の為でもあるけど、キイラの為でもあるんだ、だから、俺はキイラの為にやっているとでも思ってくれ、お前が負い目を感じることはないだろ」

たった、それだけの言葉。

しかしその言葉でなにか葛西の心の中の何かが崩れていった。

「……ああ、そうさせてもらっわ、龍騎」

名前で呼ばれたことに龍騎は目を見開く。

その様子に葛西は笑いながら、この支部の研究データの破壊のため、龍騎に背を向け、奥へと歩いて行くのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0327ba/>

無題

2012年1月11日00時59分発行